乾物屋、炭屋、米屋、家庄とうたぎできた場合を だけで、 三ツ葉、 いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、 一向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、 水洟の落ちたのも気付かなかった。 節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、 今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる 油屋、八百屋、鰯屋 はよ牛蒡揚げてん

局お辰はいい負けて、 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 ばならなかった。それでも、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい 二三度押問答のあげく、結 あんた、 それで T

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それで、 母親を欺して買食いの金をせ

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、

ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ

きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

醬油代がはいっていないと知れた。 銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 めだとの種吉の言い分はもっともだったが、 しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 しかし、十二歳の蝶子には、 種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 父親の算盤には炭代や 蓮根でも蒟蒻で 種吉の天

身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。 留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩盤守にはお唇の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種吉の水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種吉の 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭には

って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも小 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたら 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは姿に ころとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材では、はいまでは、これので、蝶子が小学校を立ていると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材

しっぽり明朝 R

しっぽり明朝 Regular

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家庄ミう年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今号 ナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる。向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかい煮、醤味、サースに 紅生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、は出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋(鯛屋

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結 あんた、 それで Ż

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

醬油代がはいっていないと知れた。 銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 めだとの種吉の言い分はもっともだったが、 しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 しかし、十二歳の蝶子には、 種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 父親の算盤には炭代や 蓮根でも蒟蒻で 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたら しかしかっぱ す 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは変に しろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材はくよく貧乏したので、蝶子が小学校を幸ると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河産横町の材

しっぽり明朝 M

しっぽり明朝 Medium

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そのれぎゃ年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今号 ナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる。向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかい煮、醤味、「おっぱん」 節季はむろんまるで毎日のことで、 醬油屋、 油屋、八百屋、

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それ で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 無茶いいなはんナ、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚 きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、 ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結 何ともい Ť

な母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、 ちょっと後悔され 蓮根でも蒟蒻で 「七厘の元を一 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたら しかしかっぱ す 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾に しろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中 人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも 奉公に出した。俗に、河童横町の材

しっぽり明朝 SB

しっぽり明朝 SemiBold

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、RE:)などのキーの一年中借金取が出はいりした。 いナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか「ハ」 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今号 紅生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、北屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、土はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋(鯛屋

008

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 無茶いいなはんナ、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい 二三度押問答のあげく、結 あんた、 それ で

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、 ちょっと後悔された。 蓮根でも蒟蒻で 「七厘の元を一 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。 吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも 小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたち 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾に しろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中 奉公に出した。俗に、河童横町の材

しっぽり明朝

しっぽり明朝 Bold

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家庄舎)年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今9 ナーと持てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる。向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいます。」 紅生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、北屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、土はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋(鯛屋

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それ で

ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 無茶いいなはんナ、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 ない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、 ちょっと後悔された。 蓮根でも蒟蒻で 「七厘の元を一 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。古の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

た。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買がたちである。これでは、またがからは、すいのというとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させ いたが、妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。 蝶子はむくむく女めいて、顔 い取って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれて 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾。 よくよく貧乏したので 螺子が小学校を卒えると、あわてて女中 奉公に出した。俗に、河童横町の材 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中 、材木屋はさすがに炯眼だった。 東三文だったそこの土地を材木屋の先代が買 奉公に出した。俗に、河童横町

しっぽり明朝 EB

しっぽり明朝 ExtraBold

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家庄とうたぎできた場合を だけで、 いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、 一向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、 水洟の落ちたのも気付かなかった。 節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、 今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる 油屋、八百屋、鰯屋 はよ牛蒡揚げてん

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それで

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 局お辰はいい負けて、 ばならなかった。それでも、 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結 T

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それで、 母親を欺して買食いの金をせ

醬油代がはいっていないと知れた。 銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 めだとの種吉の言い分はもっともだったが、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 しかし、十二歳の蝶子には、 種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 父親の算盤には炭代や 蓮根でも蒟蒻で 種吉の天

身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。 留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩が着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種吉の水 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭には

ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも小 って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたら しかしかっぱ す 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは姿に ころとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材ではよりのでは、

しっぽり明朝B1 R

しっぽり明朝 B1 Regular

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家庄ミう年中借金取が出はいりした。 だけで、 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今9 一向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、 紅生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、北はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋(魚屋) 今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それで

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 局お辰はいい負けて、 ばならなかった。それでも、 「無茶いいなはんナ、何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結 いて

な母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一 ちょっと後悔された。 蓮根でも蒟蒻で 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたら しかしかっぱ す 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾に しろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材がたらいない。

しっぽり明朝B1 M

しっぽり明朝 B1 Medium

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それ

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 無茶いいなはんナ、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚い きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結 いて

な母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、 ちょっと後悔された。 蓮根でも蒟蒻で 「七厘の元を一 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたら しかしかっぱ す 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾に しろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中 人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも 奉公に出した。俗に、河童横町の材

しっぽり明朝B1 SB

で

しっぽり明朝 B1 SemiBold

三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、RE:)などのキー 年中借金取が出はいりした。 だけで、 いナーと待てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる下向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか「ハ」 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今9 紅生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、北屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、土はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋(鯛屋

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それ

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 無茶いいなはんナ、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、 ちょっと後悔された。 蓮根でも蒟蒻で 「七厘の元を一 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。 吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれていたが 小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯眼だった。 河童横町は昔 河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったそこの土地を材木屋の先代が買い取がたち 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾に しろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中 奉公に出した。俗に、河童横町の材

しっぽり明朝B1

で

しっぽり明朝 B1 Bold

だけで、 三ツ葉、 乾物屋、炭屋、米屋、家主そり年中借金取が出はいりした。 だけで、水洟の落ちたのも気付かなかった。いナ」と待てしばしがなく、「よっしゃ、今9 ナーと持てしばしがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの擂鉢の底をごしごしやる。向いてにわかに饂飩粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいます。」 紅生姜、鯣、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、北屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入り口で牛蒡、蓮根、芋、土はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋(魚屋

の間をちょっとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、 吉とは大分違って、 よろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるとこだっせ」 とは大分違って、借金取の動作に注意の目をくばった。催促の身振りが余って腰掛けている板種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合うと、女房のお辰は種 あんた、 それ で

訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、 ばならなかった。それでも、 局お辰はいい負けて、 無茶いいなはんナ、 芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に泪がまじる位であるから、相手は驚いて きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。 何も私はたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、 素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さね 一度だけだが、 板の間のことをその場で指摘されると、何ともい ほうほうの体で逃げ帰った借金取があっ 二三度押問答のあげく、結

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。 それで、 母親を欺して買食いの金をせ

めだとの種吉の言い分はもっともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くた 醬油代がはいっていないと知れた。 婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。 もすこぶる厚身で、 しめたり、 天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、 お辰の目にも引き合わぬと見えたが、 種吉は算盤おいてみて、 ちょっと後悔された。 蓮根でも蒟蒻で 「七厘の元を一 種吉の天

は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。
吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉 は、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。 天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭に

しっぽり明朝 B1

ExtraBold

た。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われてこれがたち いたが、妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。 蝶子はむくむく女めいて、顔 い取って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭口きかれて にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させ 木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾をよくよく貪乏したので、 蝦子カ小学校を卒えると、あわてて女中 奉公に出した。俗に、河童横町の材 よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の 、材木屋はさすがに炯眼だった。 東三文だったそこの土地を材木屋の先代が買

しっぽり明朝 B1 EB